正解が見えない

イッキデス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正解が見えない

【Ｎコード】
Ｎ０８０１Ｊ

【作者名】
イッキデス

【あらすじ】
委員会で帰りが遅くなった『スズキ』。そんな彼を呼び止める同姓の少女『鈴木』さん。彼らの噛み合わない会話は『スズキ』だけを置いてけぼりに奇跡を呼ぶ。
その内キャラクターは増やす予定です。

その1・まず話が見えない（前書き）

何となく書いたものなので、期待値を極限まで下げてお楽しみください。

その1・まず話が見えない

「あ、あのっ！お話が、あるんですっ！」
と元気いっぱい声をかけられたわけだが、言われてからいよいよ五分が経とうとしている。
にも拘らずチックタックと時計の秒針の音だけがやけに響くのは、一向に彼女が『お話』とやらを言い出さないからに他ならない。
放課後、とある先輩殿に無理やり入らされた委員会が無駄に長引いてしまい、あれやこれやとやってようやく終わったと思えば、すっかり西日である。あの先輩殿の完璧主義にうんざりしつつ、いざ帰ろうと誰も居なくなった教室にかばんを取りに行くと、
「・・・・・・」
彼女に声をかけられた訳だな。あの台詞から一言も話そうとしないが。
彼女は確かに僕に何か話があるのは分かった。しかし、呼吸を整えては口を開いては閉じ、何か言おうとしているんだろうが残念ながら音として聞こえるのは息を吐く音だけだ。
たった五分ではあるが、すっかり見飽きた彼女のことを考える。
まっすぐに切りそろえた前髪。いまどき珍しくなりつつあるその黒髪は、これまたいまどきな感じのおさげ髪。
『鈴木』さん、だったか？下の名前は聞き覚えがない。とはいえ一応同じクラスではあるし、僕の苗字も奇しくも同じ『スズキ』であるので一度も話したことはないが顔は知っている。
逆に言えばその程度の関係だったりする。
「・・・あっ、その・・・」
ようやく声を出したが残念ながら文章にはならなかった。
今のは惜しかったな。って、いつまで待たせるつもりだ、この人？僕も滑舌がいい方ではないから気持ちは分かるけどさ。
取り急いで帰ってもやることなどないが、こうして無為な時間に

いつまでも付き合うほどお人よしじゃあないぞ、僕は。
「・・・・・・」
西日をバックに佇む彼女はなかなかどうして様になっていたが、僕の心はイライラマックスだ。
いい加減痺れを切らし、こちらから何か言おうと思ったが、とある推論が頭をよぎる。
勿論、彼女の用件など見当は付かん。なにしろ一度も話したことなどないからな。
だが、逆に言えば彼女もまた同じ条件ということだ。
わざわざ呼び止めてまでの話がある。しかし、面識はほとんどない。
すなわち。
絶対ではないだろうが彼女がなかなか話を切り出せない理由がひとつ、僕の脳裏に浮かぶ。
「スズキ」
僕は名乗ってあげた。
彼女は目をぱちくりと大きく目を見開き、すぐさま頬を染めて俯いた。視線はちらちらとこちらに向かうが、目が合うと異常な速度で反らす。恥ずかしい、ようだ。
ふん、この反応からすると僕の推論は間違ってはいないようだ。
つまり彼女は僕の名前を知らなかったのだ。
僕は知っていて彼女が知らないのはいささか悔しい感じがするが仕方がない。僕はクラスで目立つタイプの人間でもないし。
彼女は僕の名前を知らない、そう考えると今までの態度にも納得がいくというものだ。
話があるのに相手の名前は分からない。うん、僕が同じ立場なら確かに話を切り出しにくい。
それでも話がある以上最低限、名前くらいは知っておかねばならんだろう。「あんた」とか「君」と呼ばれるほど親しいわけでもないし、「フーアーユー」と尋ねるのも失礼だし。

「僕はスズキだ」
再び、名乗る僕。これで彼女も話し出すに違いない。
二度目の「スズキ宣言」でようやく彼女は顔を上げた。
「・・・そう、だったんだ」
・・・なにが？同姓である事がそんなに深刻か？そう言いながら俯いていた顔を上げる彼女は、これでもかと言うような笑顔を浮かべている。なんでやねん。
「――たしも」
うまく聞き取れない。もう一声！、と促そうと僕が口を開こうとしたが、彼女の今までとは比べようもない快活な声で遮られた。
「私も、同じですっ！！」
「うおぅ！」
何も教室中に響く声で言わんでも。誰も居ないし居たとしても聞かれて不味い話ではないが常識というものがある。あと同姓の人間がいたことがそんなに嬉しいかな？『スズキ』なんて苗字、『田中』と同じくらいの数いるんじゃないか？
当の彼女はレッドカーペットの上を歩くハリウッド女優のような晴れ晴れとした表情で、まっすぐと僕を見据えている。えーっと、僕が何か言うの待ってんの？僕と君が同じ苗字って事に対して？
「ああ、そっすか。僕は知ってましたけどね」
特に感想もないので適当なことを言ってみた。
「ほ、ホントに・・・！？嬉しいっ！」
・・・・・・泣いちゃったよ。僕の答えは正しかったのか？僕のリアクションは合ってるの？
僕の困惑をよそに、彼女は大粒の涙を目の端に浮かべ、
「あのっ！きょ、今日はコレで帰りますっ！私、舞い上がっちゃって冷静でいられなくなっちゃうから・・・」
・・・・・・えー？話の続きはー？
「じゃ、じゃあ、明日からっ！よろしくお願いしますっ！」
『鈴木』さんは深々と一礼して今にも踊り出さん勢いで帰っていっ

た。喜色満面といったところだろうか。
西日に向かって小さくガッツポーズをとる『鈴木』さんの背中が小さくなっていくのを見て僕は思う。
残された僕はどうすればいいのだろう？
・・・・・・
答えは一つだ。
「帰るか」
誰に言うわけでもなく一人呟いて教室を後にした。

ん、『明日から』？
また明日、じゃなくてか？
一瞬浮かんだ疑問。しかし僕は深く考えようとは思わなかった。
「疑問と言うなら彼女の発言は最初っから最後まで何一つ分からん」
これ以上分からないことを増やしたくなかった。

これが僕の、明日から始まる全ての面倒事の序章だ。
大分経ってからわかることになる。ここでの僕の対応は、すべての面で間違えていた事に。

その2・本題に入れない（前書き）

ニューカマーの登場。

その2・本題に入れない

「いやー、話には聞いてたけどよ、お前ホントに先輩に気に入られてんのな？」

と実に意地の悪い声で、僕の話に合いの手を打ってくれるのは友人の『鬼東（きとう）』である。

『鈴木』さんの一件から翌日。

とりあえず僕は友人たちに昨日のことを話してみたかった。果たしてあの噛み合わない会話はなんだったのか？はっきりいって僕一人では処理が追い付かない出来事だったからな。

話し出すと長くなりそうなので僕は昼休みになるのをじっと待つこと数時間、現在こうしていつもの面子で学食で飯を食っている。

この学校に入学してから一年と数ヶ月、ずっと同じクラスなので付き合いこそ短いが親友と言える。

僕の隣には現在肩をがんがん小突いている見た目も中身も軽い男、鬼東。もはや小突くと言うよりエルボーに近いから止めてくれ、痛いから。

「まあ、『スズキ』は頼まれたことだけはしっかりやる男だからな。彼女も重宝しているんだろう」

僕の対面には眼鏡を掛けたいかにも神経質そうな男、『神宮寺（じんぐうじ）』が魚の切り身に入った小骨を一本一本丁寧に取り分けている。その性格でなぜ焼き魚が好きなのか理解に苦しむ。

「嫌味か、それは？」

現在話しているのは委員会で遅くなった、のくだりであり、僕が本来話してみたいことの前振りだったりする。

とっとと本題に入りたいのでこの辺はさくさく進みたいが、僕の気持ちなんぞ一遍も顧みず、鬼東は熱弁を振るう。

「いいや、あえて言うなら妬みだ。あんな美人と二人きりだなんて！俺なら確実に性に走る！」

「正直なのはいいことだが場所と時間を選んでくれ」
神宮寺はそれを聞いて話題を広げては、適当なことを言うもんだからなかなか話が前に進みやしない。こいつの場合鬼東と違って、僕の言いたいところが別にあることを知っててやっているに違いない。時折、彼自慢の眼鏡の反射光が僕の目をつんざくのが何よりの証拠だ。
気が付けば、我が学園の学食は生徒数に反比例したかのごとく席数が少ないにも拘らず、鬼東の周りだけぽっかりと空いている。単純にさっきまで座っていた一年の女子が鬼東の発言を聞いたが否や、災害を予知した野鼠のように散開しただけなんだがな。
「ああっ！いつの間にか俺の周りに誰も居ないっ！」
「いいじゃないか。不特定多数の誰かに好かれたって意味はない。恋人が一人居れば」
「うるせぇ！現状で誰にも好かれてねぇんだよ！俺は！」
だったらせめて声のボリュームを下げてくれ。あの発言を聞いて一緒に飯を食いたがるのは僕らくらいのものだろうな。こいつはこいつであそこまで嫌悪感を態度で示されて、言われるまで気が付かないのは大したものだ。
やいのやいのと言い合う二人をぼんやり眺めて考える。
・・・しっかし、本題に入る前の前振りに食いつくとは予想外だ。いつまで経っても『鈴木事変』（たった今つけた）に辿りつかない。そんなにいいか？あの人。
「あのなぁ。あんなのに気に入られても迷惑なだけだって。そもそもいいように使われてるだけだ。それでも羨ましいのかよ」
このままでは本題どころかこいつ等二人の漫談を見ているお客さんになってしまうので、不本意ながら話に付き合う。口に出した言葉も、心の声も言ってて悲しくなってくるが。
「羨ましいとも！だって、美人じゃないか！代わってくれ、今すぐに！」
鬼東は椅子をケツで押し飛ばして立ち上がり、舞台役者よろしく

命の限り叫ぶ。こんなことに腹式呼吸を使ってんじゃねぇ。
まあ、鬼東の言うとおり確かに先輩殿は同姓が羨むほどに美人だ。昨日の『鈴木』さんはカテゴリ分けするなら可愛いと言う言葉がしっくり来るが、先輩殿は十人中十人が美人と口をそろえて言うだろう。
しかしそれは一つの要素に過ぎず、僕にとっては事あるごとに面倒ごとを無理やり押し付けるだけの、ただの厄介な先輩なのだ。美人だろうが可愛かろうが不細工だろうが、面倒であることには変わりない。損得で割り切れば大損こいている。
「ボクは羨ましくないから、お構いなく」
眼鏡の辺りからキラリ、と言う音が聞こえたが気のせいだろうな。神宮寺は眼鏡を中指で押し上げながらそう答えた。こいつは僕の心情を汲み取れているようだな。
鬼東にだけ向かって僕は嘆息交じりで答える。
「あの先輩殿は物好きにも風紀委員と生徒会を掛け持ちでやるような変態だぞ。付き合わされる僕は、自分が所属している風紀委員会ならまだしも、生徒会の仕事まで手伝わされる始末。いくらか貰ってももいいくらいだ」
置かれた現状に嘆いてみたが、返ってきた答えは予想を裏切る。
「もう付き合っちまえよ！」
なぜそうなる？
「それだけ君が有能なのだろう。誇ると良い」
ニヤニヤ笑いながら言うんじゃねぇ！
っていやいやいや違う。こんな話はするつもりじゃなかったんだった。強制的に話を中断させるべく僕は叫ぶ。
「ってかいい加減本題に入らせろ！あんなウザったい先輩のことなんかどうでもいいんだよっ！僕が言いたいのは――」
「何かしら？あたしもぜひ聞きたいわね」
・・・・・・
空気が凍った。背後から聞こえてくるその声は、雪女の吐息にも

勝るとも劣らない。図書館でトライアングルの鳴らしたように冷たく響いた。
ちなみに今はゴールデンウィークを過ぎて一週間ほど経っている。日差しは暑くなる一方なこの時期でも空気が凍ることもあることを僕は知った。なぜか食堂中が沈黙している。全員見てたんなら一人くらい教えてくれたっていいじゃないか。こんな危機というか鬼気が迫っていることを。
僕の大好きな漫画の一文を引用するなら、ケツの穴にツララを突っ込まれた気分、だな。
姿は見えずともすっかり聞きなれたその声に、僕は喉を詰まらせる。
「・・・うぐっ」
「うひゃぁっほう！先輩だー！生先輩！」
「いつも言っているだろう？ボクみたいにちゃんと小骨を取らないからそうなる」
エロガキはアホみたいに舞い上がってるし、クソ眼鏡は先刻と同じようにニタニタ笑いながらそんなことを言ってくれやがる。
「あたしは悲しいわ。いつも可愛がっている後輩から『どうでもいい』なんて言われるなんてね」
ちなみに僕の今日の昼食は焼きそばだったりする。小骨どころか魚が入っていない。
「こっちを向きなさい」
背中越しに聞こえるレイピアのように鋭い声に、
「了解でーす！」
僕は新入社員も真っ青ないい返事をして振り返った。
そこには茶に染めてはいるがどこか上品でもある絹のような長いストレートヘア。生まれる前に神様かなんかに特別に発注したんじゃないかと疑うほど整った目鼻立ち。あとは、えーと・・・スタイルがグンバツ？あんてぃーくどーる？みたいな？僕は女性を表現する語彙に恵まれていないので、ざっくりした説明で申し訳ない。

要するにとびっきりの美人、先ほどから話題に上がっていた件の先輩殿が僕を見下ろしていた、って事だ。見下げている、とも言えなくない。
「ウフフ。聞き分けのいい子は好きよ」
笑顔なのは大いに結構だが、こめかみに青いいナズナが走っているし、声だけウフフと言われても機嫌が損なっていることを隠すつもりがないような感じがすごく怖い。美人が台無し、とは言わんが。
「そこの眼鏡君！」
と神宮寺を呼びつつ僕の頭をヘッドロックする先輩殿。花の香りがふんわり香るが、嗅覚より痛覚のほうが勝っているため痛い痛い。
「この子、借りていくわよ？」
「ええ、どうぞ」
まさかのご本人シカトに僕は驚きを隠せない。
「あっ、先輩！俺も俺も！俺もお供しマース！」
「あなたは使えないから必要ないわ」
「ｓ．ｈ．ｉ．ｔ」
なんだこのやりとり？鬼東の脈絡のない提案は先輩殿の容赦ない言葉に一刀両断。どちらも末恐ろしいな。
先輩殿（基本的にそう呼んでいるし、それで事なきを得ているので名前は知らん）はヘッドロックから腕の関節を決めた後、自由を失った僕の腕をとりながら、
「じゃあ、行きましょう。仕事は腐るほどあるわ。文化祭に体育祭、次の球技大会のこともね。大丈夫よ」
と、にっこりと笑いかけてくれた。
鬼東はハンカチを噛んで泣き崩れ、神宮寺は未だに魚の小骨を取りつつ、ドナドナを斉唱。ギャラリーはみな顔を伏せ嘲笑と哀れみの視線を持って僕を見送ってくれた。

それからの僕は昼休みは勿論、次の休み時間放課後。果ては向こう一週間の自由ををすべて先輩殿の手伝いに当てる羽目になった。

って、結局『鈴木事変』の話してないじゃねぇか、僕。
まあ、気が付いたのはすっかり一週間が経ち、ようやく自由を取り戻した翌日だったりするんだが。

その2・本題に入れない（後書き）

僕自身、本題に入ることなく終わるとは思いませんでした。
次はもう少し話を進めたいと思います。

その3・釈然としない

「えっと、一緒に楽しく話しながら学校に行くんです。きっと楽しいです！」

などと僕に向かって熱弁を振るっているのは、あの『鈴木』さんだったりする。

あの先輩殿から課せられた強制労働一週間。どうにか無事にやり遂げ、充実感、などは皆無に等しいが、とりあえず自由な時間が出来たことに喜びを噛み締めつつ次の日の朝を迎えた。

さて今日は早く帰れるから誰か誘って、遊びにでも行こうかしら？などと思わず口調がオカマになるほどウキウキ気分で学校へと向かったわけだが、

「あ、あのっ！」

と、家を出て十メートルも歩かない内に声をかけられた。

女性の声に違いないが、先輩殿ではない。かといって先輩殿以外に僕に声をかけるような女性が思い当たらず、首を傾げつつも振り向いてみると、

「お、おはよう。スズキクン」

『鈴木』さんが両手でかばんをぎゅっと握り締めながら、おっかなびっくりとした様子で僕を見ていた。電信柱の影からこっそり体半分出しているその姿からすると、おそらくは僕を待っていたのかもしれない。彼女の顔はガラガラを目の前にした赤子のように、上気して真っ赤に染まっている。

「・・・・・・」

「あー、おはよさんデス」

片手を上げて軽く挨拶してみるが、脳内ではちょっとした祭りである。

す、すっかり忘れていた。一週間前の『鈴木事変』の当事者。思えばここしばらくの忙しさも元を辿っていけば彼女の行動に起因す

ると言える。その忙しさのせいで彼女のことを忘れてしまうとは本末転倒もいいところだ。
むしろ忘れていた自分にびっくりだ。同じクラスだから視界に入ることも多々あったろうに。
しかし言い訳するつもりはないが、彼女の方だって僕に話しかけたりはしなかったわけだしお互い様と言える、よな？
「えっと、そのなんだ。一週間振りっすね」
「・・・私は、スズキクンの事、ずっと見てました」
アイター。鈴木さんは悲しそうに細い声で呟く。第一声間違えたー。
動揺した心を気取られないように、僕は矢次早に口を動かした。
「あー、えー、ひょっとして誰か待ってるんですかね？」
『鈴木』さんはゆるゆる首を縦に振る。しかし、急に重力が二倍になったようにあからさまに肩を落とす。益々顔色がよろしくない。ぬう、この質問はお気に召さなかったようだ。
「ひょっとしてひょっとすると、僕を？」
「・・・！は、はい！」
おっ、声を出したぞ、『鈴木』さん。今度は主人と散歩に行くことを待ちきれない犬の尻尾のように、首をぶんぶん縦に振る。後ろで揺れるおさげ髪もまるで犬のそれに見えてくるな。コレは正解か？１０ポイント？
って大喜利やってんじゃねぇんだから。どうせやるならもっと一生懸命ボケたいっての。
「そんじゃ次の質問。なんでまた僕を？」
とはいえ疑問が残る以上、質問は続けなければならんだろう。今までと違って、こればかりは答えに見当も付かないこの質問。
はたして正解は？
「えっと、一緒に楽しく話しながら学校に行くんです。きっと楽しいです！」
・・・・・・とまあ、ようやく最初の一文に辿り着いたわけだ。

ところで答えになってんのか？
　ことごとく受け答えが噛み合わない彼女に眉をひそめていると、
「いい、ですよね？」
おどおどした様子で僕を窺う『鈴木』さん。その様子はまだ僕には必要ない父性本能を刺激するほど愛らしかったが、断らないことを前提にしたその言い草はなんだか気に掛かる。
「・・・・・・んじゃ行きますか？一緒に」
実際、断る理由がなかったので承諾しちゃったけど。
「・・・！！！はいっ！い、一緒に！」
こうして僕らは共に学び舎へと向かうことになった。

その3・釈然としない（後書き）

結局学校にたどり着くことなく次へ。ホント話が前に進まなくて申し訳ないです。

その４　そのノリは頂けない

「お、おいスズキ！あんな楽しそうに話してる鈴木さん見たことねぇ！？お前いつから鈴木さんと仲良くなったんだよ！？」
と、声を荒げて僕の肩をがくがく揺さぶるのは勿論、鬼東だ。僕の少ない交友関係において女性関係にアグレッシブなのはこいつくらいのもんだ。
『鈴木』さんと二人で教室に入るや否や、教室は鍋をひっくり返したような騒ぎになり、気が付いたときには鬼東が僕の席でガッチリ僕の肩を組んでいた。
「スズキが『鈴木』さんと、なぁ。意外な組み合わせだ。先輩殿は二号さんか」
実に高校生らしくない発言をするのは、今朝がた買ったであろう本のブックカバーを綺麗に畳んでいる神宮寺。僕の隣の席だ。
「なんでここで先輩殿が出てくる？って言うかそれ絶対、先輩殿に言うなよ？表現的にあの人の逆鱗に触れる」
なんだかんだでプライドの高い人だからな。確かどこぞのお嬢様、って聞いた気がする。
「それは僕が決めることだ。」
この意地の悪い男に聞いたんだったな、そういえば。
「んな先輩の事なんかどうでもいいんだよ！今は鈴木さんだ！聞いてんのかぁ、スズキぃ！」
「鬼東。君はスズキが君と同じようなことを言って、先輩殿に連行されたことを忘れたのか？」
スズキスズキと連呼する鬼東と神宮寺。それに応じてギャラリーがわらわらと湧き出した。
ええい、うっとおしい。どうやら鈴木さんの名はクラス内ではそこそこのネームバリューのようで、男子の大半が僕らの周り聞き耳を立てている。同じ『スズキ』としては嫉妬も禁じえない。

「スズキ鈴木うるせぇぞ！お前らも散れ！どこの魚河岸のつもりだ！」

・・・・・・・

僕の叫びを聞いて男子の大半が首を傾げている。うん、最後の一言は余計だった。

「名前の『鈴木』と魚の『スズキ』を掛けたんだよ」

傾げていた首を元の位置に戻し、あちらこちらで上手いだの寒いだの聞こえ出したあたりで始業のチャイムが鳴った。・・・要らないフォローをありがとう、神宮寺。

どんなに僕と鈴木さんの事が気になっていても悠久の時には逆らうつもりはないらしく、集まっていたギャラリーは倦怠感丸出しで己の席へと帰還する。鬼東が強めの一瞥をくれたのは少々驚いたが。

担任が教室に入ってくる音と同時に視線を感じ、発生源を探してみると、

「・・・」

件の『鈴木』さんが僕に向かって小さく手を振っていた。そういえば先ほどのやり取りは、勿論彼女も見ていたはず。しかし、彼女の方はそれほど騒ぎにはなっていないようだ。一体どのようにしてやり過ごしたのか、今後のためにも聞かせて欲しいところだ。

そんなことを考えている間に、彼女の振る手がだんだんと弱弱しくなっていく。そりゃ手を振ってあげた相手が、シカトこいて物思いにふけっているんだから当然か。

さっきの事もありうんざりしたが、仕方がない。彼女の責任ってわけじゃないしな。軽く手を上げて答える。彼女はビクリと肩を震わせ、慌ててそのもみじのような手を引っ込めると真っ赤になって俯いた。もうすっかりおなじみの態度といえる。

「・・・！！！」

そして光線といっても差し支えようのない視線を、今度は明確に鬼東の方向から痛いほど浴びた。

やれやれだ。僕本人ですら現状を正しく認識していないのに。

担任の抑揚のない朝の注意事項を尻目に、僕は今朝の事を思い返す。

なし崩しにと言うかまんまにと言うか、二人連れ立って学校へ向かっているわけだが、

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

一切会話がない。てっきり先週言いそびれた話になるかと身構えていたのだが、実際にやってきたのは謎の沈黙だったりする。

横を歩く彼女を一瞥するとじっと押し黙りこちらの言葉を待っているようにみえる。前のときもそうだったが、この人は話しかけておいてなんで黙るかね。かと言って僕に期待されても困るのだ。女性に対する経験値は著しく低いのだから、僕は。

しかし、彼女は俯いてはいるものの、現状に不満があるのは僕だけらしい。彼女は抑え切れないのか、にへらと笑みを浮かべながら、例の時折こちらを見てはまた俯く、みたいな事を繰り返している。

・・・沈黙がつらい。このままでは埒が明かん。彼女からの支援も期待できん。いざ、鎌倉。

「もしもし、鈴木さん」

僕は女子との会話という名の戦場へと赴いた。

「その、何か僕に話でもあるんでない？」

勿論先週の事を示唆している。割りと重要な話があるっぽい雰囲気だったし、もしそれが生徒会繋がりだと僕の首は先輩殿の手によって飛ぶ。物理的になのか慣用句としてかは分からんがマジ怖い。

しかし、僕の質問は斜め向こうに解釈されたようで、

「は、はい！楽しくおしゃべりしましょう！是非っ！」

と彼女は鼻息荒く意気込む。いや、世間話じゃなくて――

「えっと、じゃあ、じゃあ・・・す、好きな食べ物、教えてください！」

先週の事をだな――
「お、お願いしますっ！」
・・・・・・
「僕はなすが嫌いだ」
「あっ、なすが・・・ってえ？嫌い・・・・・・なもの？」
そーいう話がしたいんじゃない、という僕の思い。そして真っ赤になって必死になって世間話を懇願する彼女の想い。それらがない交ぜになった結果、自分でもわけの分からない発言になってしまった。結局、双方の意見が合致していない。コレなら素直に彼女質問に答えた方がよかったな。
「皮は昔のゴミ袋みたいな色と歯ざわり。中身は液状ともいえるグニュグニュ感。すごく嫌いだ」
もはや、言い繕うのも面倒なのでこのまま話を続けさせてもらう。
鈴木さんはしばらく唇に手を当ててしばらく逡巡した後、
「・・・うん。よくよく考えたらそっちの方が参考になるかもしれません。・・・・・・あっ、ちょっと待ってください！」
と、飾りもへったくれもない、学校から配布されたままカスタマイズされていない学校指定のかばんを、いそいそと自分の腹の前に持ってくる。どうやら何かを探しているらしい。
僕の好き嫌いが何の参考になるのかと考えていると、鈴木さんは手帳とボールペンを取り出し、
「続きをどうぞ」
と、雑誌の取材のようにスタンバイ。僕の発言をメモるつもりらしい。
「お願いします」
駄目押しの一発。
「・・・了解」
彼女の気迫に押されてしまい、なすがまま首肯してしまった。
こうして僕は学校に着くまでの十数分、鬼東に肩を組まれるまで延々と彼女の質疑応答に散々答える羽目になった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0801j/

正解が見えない

2010年12月30日07時38分発行